

畏友 中島三千男先生

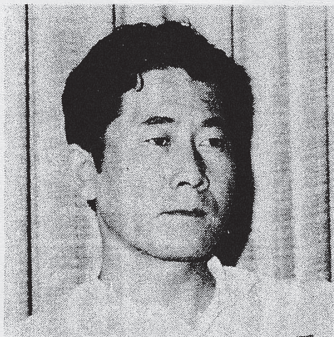
岡 島 千 幸

中島先生も、今春ついに定年退職を迎えられた。次の資料1は、今から三十五年前一九八〇年九月三〇日付「神奈川大学通信（第二一九号）」の新任教員紹介のコラム記事（プロフィール）である。

この度、三十五年振りにこの記事を再読し、その頃の事を色々と懐かしく思い出した。このコラムの右紙面は、大学創立五〇周年記念事業で完成した新図書館の落成記念式典の記事であるが、当時、大学や我々の属する外国語学部も現在とまったく異なっていた。先生が赴任された頃まで、大学はまだ大学紛争の後遺症で、学部教授会が旧本館の会議室ではなく二本榎の別館（大学創立者米田吉盛の別宅であったが、当時大学の施設として利用されていた。現在は学生寮に建て替えられている。）の畳の大広間で開催された事もあった。そんな事が出来たのも、当時の学部は、英語とスペイン語の二学科、他は体育と教職、それに我々の一般教育に所属する教員から成り、全体で四十数名であったからである。したがって、人文と社会の一般教育担当教員は、十数名でお互いの気心はいやでも知り得ていた。そして、地歴の教員は、それぞれ一名ずつであった。

この中島先生紹介の記事を書いたのは、私であったが、この文章には当時の私の達成感のような感慨が秘めら

プロフィール



中島 三千男

外国語学部助教授

中島先生は、この四月奈良大学から本学の専任となった。担当は日本史。先生は、熊本生まれの儒育者。現在でこそがっつりとした体格をしていらつしやるが、子供の頃は身体が弱かったという。しかし中学生の時から、バスケット・ボールをやるようになって病氣もいなくなり身体に自信が持てるようになったといふお話である。

先生の現在まで発表された論文は、近代日本の国家と宗教の關係に鋭い問題提起と論証をされたもので、学会で注目されており、今後一層の研究発展が期待されている。

人柄は、眼光鋭くとも、おだやかな心の太変あたったかい方である。本学の水にも慣れれば、講義にゼミにさらに活躍されるにちがいない。

資料 1

れている。

私は世界史担当教員として着任すると、その前年、日本史の担当教員が退職したため、すぐに人事選考委員にさせられた。その委員長は文学の長老教員であつたが、こちらは同じ歴史学という事で人事の中心的役割を担わされたのである。教授会で、選考委員長から最終選考までの選考過程とその理由を私にも説明するよう発言があり、私も懸命に話したことを憶えている。この人事では最終的に、ある学会のボスとして噂の高かつた委員の先生の推薦する人物と中島先生とどちらにするか難航した。今から考えて見れば、まだ着任したばかりの三十代の私のような若造に、その先生は、委員会と教授会で押し切られたのであるから忌まじましい気持ちであつた事はまちがいがいい。

このようにして始まった中島先生とのご縁であるが、新学期早々、大学広報課から私に新任者紹

介記事の依頼が来たのである。それで、先生の生い立ちや学生時代の事を色々と伺い、制限字数いっぱいにまとめたのが「プロフィール」の記事（先生は、福岡生れで、熊本は御両親の里の由。三十五年振りで訂正いたします。）である。先生は、高校時代まで九州福岡で過ごされたが、戦後何も無い時代に育った我々の世代、先生の幼少期のお話は、私も自分の生い立ちと重ね合わせてお聞きしたように憶えている。なお、現在、神奈川大学のイメージ・イラストレーターとしても活躍されている本学外国語学部特任教授わたせせいぞう氏は、先生が小倉高校時代の同窓・同級生であるとのことである。

先生とは研究室も隣同士であったこともあり、個人的にも接する機会が多かった。二十数年ほど前だったと思うが、その頃私が京都や関西に出かける折に定宿にしていた「岩波」という旅館に「ぜひ自分も泊まってみたい」という。それで、お互い関西での仕事を済ませ京都で落ち合うこととなった。二人で同志社大学から今出川通りの京大キャンパスの側を歩きながら、期せずして先生が下宿をしていた場所とか、また奥様と知り合った頃よく一緒に歩かれたという道などを思い出話と共に伺った。その後、先生が学生時代からの馴染みのうどん屋に寄り、東山の清水寺に向った。目的は、観光コースとは別の塔頭寺・善光寺の住職福岡精道氏にお会いすることであった。先生は、学生時代にこのご住職に大変お世話になったとの事。私もご紹介いただいたが、まことに気さくな老師で「せっかくだからこちらにどうぞ」と、一般には非公開の仏足石の画像を案内して下さった。半地下構造による吹抜き五階の上から、その下の仏足石を見ると、巨大な仏陀の立像が想像される仕組である。

この夜、「岩波」に宿泊したのであるが、通称骨董通りにあったこの典型的な京町屋作りの宿に先生が気に入ったか否かは、聞きそびれた儘である。ただ先生は、この宿の一件ばかりではなく、その後も私が話したレス

トランや飲み屋に関心を示し、案内させられた事がよくあった。その中でも、横浜関内のスタンドバー（現在は無くなったが、戦後まで洋酒の輸入元も兼ねていた店で、大仏次郎は常連客の一人であった。）や、野毛の焼鳥屋などは思い出深い。

中島先生は、一昨年の私の退職記念号に巻頭文を書いて下さった。その中でお互いに長年、大学入試業務をめぐって大変苦勞したことから、私との関係を「戦友」と位置付けて思い出を語っている。先生は、「今時、死語になっている言葉を使って恐縮」と断っているが、我々のように戦中生まれ世代は、長い間生死を共にした人間同士と同様の体験をした場合、つい脳裏に浮ぶ共感語と言ってよいであろう。先生と同じ戦後七十年を経て、この言葉が名実ともに死語となってくれること（昨今のわが国の政治状況を見ると不安を感じるが）を切に願うのみである。

先生は、経済学部部の山口徹先生からの「命」により翌年から作問責任者とのことであるが、私の場合は、着任して右も左もわからない数か月も経ない内に、あなたが責任者ですよ、と言われ慌ててそれ迄の予備校との関係を整理した次第であった。このようにして、お互いに毎年の苦勞が始まったのであるが、一九八五年に一般教育教員の増員が一部認められ、日本史、世界史担当教員が一名ずつ増えた。これにより、お互いに毎年の責任者からは少なくとも免れるはずであったが、運命の悪戯か、先生も私もその後それぞれの相方の先生がご病気や事故などでそれ処ではない年が長く続いたのである。

先生は、一九九五年から学部長に就任、二〇〇三年から副学長に、また二〇〇七年には学長となったため、責

任者どころか入試業務はこの十年以上にわたって出来なくなった。この点では先生はまことに付きに恵まれ、激務が始まる頃に就任された相方の先生は、その後「強力な助っ人」となり中島先生を支えられて来たことは忘れられない。

入試業務をめぐっては、お互いに際限のない恨み話があるが、先生はこの巻頭文の中でご自分の立場から戦友同士の恨み節を大変よく整理して話して下さっている。ただ、今から考えても遣る瀬のない思い出は尽きない。

「この夏は論文をまとめたので」、あるいは「引越しがあるので」等々、個人的に密かに作問委員を外してくれと頼み込んで来る方がいた。また、委員は引き受けても「公務出張だ」とか、事前に御本人にも予定を聞いて会議の日時を調整していても、当日になって「ドタキャン」して平然としている委員。作問検討会議の最終日になっても連絡しない委員によく話を聞くと、まだ「出来ていない」との事。どうしようもないので、こちらが徹夜して代わって穴埋めをする等、他人からすれば喜劇のような悲劇が毎年のようにあったのである。

作問会議は、その検討過程で、それぞれ教員の研究者としての能力や教養、また人間性などが自ずと表われる側面もあった。著作等で社会的に評価の高いと言われる先生でも、実際にお話を聞くと大変教条主義であったり、その専門分野以外は基礎的な事を驚く程ご存じなかったり、権威主義的で少々性格破綻者ではないかとあ然とさせられる事もあり、会議全体に責任を負っている立場からは、人間観察を強いられることも多かったのである。

これらの事を、先生と換気の悪い地下会議室（ここは、朝から一日仕事をしていると酸欠状態となり私は苦言を呈し続けた）でお互い残務整理をしながら、それぞれの愚痴をこぼし合った事が思い出される。しかしながら、先生は、私とは人間としての出来が異なっていたのである。先生は、行動的でエネルギーが豊富であった。

先生は、夏季休暇中、入試業務が一区切りつくと寸暇を惜しむように毎年、京都の大山崎をはじめ各地の研究調査に出かけられていた。先生の研究は、天皇制や明治以降の国家神道、中でも戦後負の歴史遺産として残されている海外の神社遺跡の調査もされていた。北は旧樺太、旧満州、朝鮮から台湾、さらには委任統治領であったサイパンやテニアン島などの旧南洋群島におよんでいる（これらの研究成果は、『海外神社跡地の景観変容―さまざまな現在（いま）―』お茶の水書房、参照の事）。

先生の研究で私に取って最も印象深い思い出は、一九八五年の春先に箱根合宿でのご報告であった。この合宿は、この数年前、経済学部の日羽邦男先生が、「短大に網野善彦先生もいらつしやったことだし、学内の歴史関係者を集めて研究会をしませんか」という申し出があり、それで当時短大所属の吉井蒼生夫（現法学部）と田島泰彦（現在、上智大学）両先生、それに中島先生と私が幹事となって始まっていた。合宿は、主に三月末に行なう事が多かったが、夜の十一時頃研究会が一応終了すると、アルコールを片手に懇親会となった。何年であったか、日羽先生か山口先生か、「江戸時代まで封建制社会とするか否か」をめぐつて口火が切られ、網野先生と三者で激論となり、私は少々興奮を覚えて聞き入った事が懐かしい。一方若手を中心に地下の卓球室で、深夜におよぶ打ち合いがよく行なわれた。この頃は網野先生もお元気で、仲間にはしばしば加わっていらした。この深夜の卓球の際、私は中島先生の新たな性格を思い知る事となった。それは、相手との競争事、勝負事となると、先生は顔の表情を露わにして絶対に負けまいとする激しさであった。私は、いつも先生はまことに穏やかな印象が強かっただけに驚かされたのである。

この箱根合宿は、大学の保養所で行われたが、合宿は、このような研究会ばかりでなく一般教育部会や我々の

学科によって、一般教育のあり方、また組織改革をめぐって八〇年代から九〇年代にかけて毎年のように行なわれた。当時、一般に大学の諸悪の源は一般教育にあるかのようにかまびすしかったし、また神奈川大学の中で一般教育の組織をどのように改革するか様々な意見や案が検討されていた。私は、一般教育検討委員会の学科委員をさせられていたが、この組織改革の方針をめぐって学科の中で合宿を通して活躍され、仲間から期待されるようになったのが中島先生であった。先生は、在職三十五年の中で、学部長となって昨年学長を辞めるまでの約二十年間、ほとんど切れ目なく大学の教学の長を中心に大学行政を担い活躍されたわけであるが、先生がこの分野に目覚め先生を突き動かす発端は、一般教育に対する情熱であり、その天性のバイタリティーと行動力がこの二十年を支えたと言えよう。

先生は一方で、一九九一年から日本常民文化研究所を母胎として始まった「歴史民俗資料学研究所」という独立大学院の教員も兼務されていた。この分野での先生の活動は、学内でも私の知らない領域ではあるが、神奈川大学が二〇〇二年から二〇〇七年におよぶ文部科学省によって採決された二一世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において、先生の研究も重要な役割を占めていることは言うまでもない。

先生は、教学の長としての激務（先生は、この間、週末に自宅に戻るのみで、週のほとんどを横浜のホテルを利用していた）の一方、研究者としても成果を残されていることに驚かされるが、これも先生のエネルギーシユな性格が関係していたのであろう。

エネルギーシユといえば、思い出される事がある。先生が大学に赴任して一年目ぐらいだったと思うが、体育館で中学時代から愛好しているバスケットボール（高校三年時、東京オリンピック九州ブロック強化選手となり、

自身名手との自負があった。)の練習中、アキレス腱を切断されたのである。私は体育の先生からの連絡で、元住吉の病院に見舞いに行くと、御本人、ニコニコしながら「ぶすつとやってしまいました」。こちらは妙な安心感をうけたのであった。先生は、確かその後、もう一方のアキレス腱も切っているはずである。それにもかかわらず、二〇〇〇年、ヒマラヤのアイランド・ピーク(六一八九m)登頂を成し遂げる。まことに不屈の魂である。

この度の思い出話の締めとして、どうしても触れざるを得ない話がある。それは、先生も二人のプライベートな事として述べられているように、「禁煙同盟」の件である。この話は先生の名譽にもかかわることなので、私は先生が公にしなければ闇の彼方でもよかったのであるが、お話の内容に些か誤りや先生の誤解もあるので、資料2(岡島・中島協定)をご覧いただきながら以下述べて置きたいと思う。(実は、この協定書の上段に、協定書作成経緯についての前文があるが、紙面の関係で省略した。)

まず、先生は「十年ほど前」と、されているが一九九六年であるからもう二十年近く前の誤りである。確かこの年の夏休みに入る頃の打ち上げ会の席で、お互いに禁煙するために罰金制度の導入はどうかと先生が提案されたのである。私は、この案を話半分で聞き流していたのであった。ところが九月に入って、この様な先生の署名付き協定書が私のメールボックスに入っているのを見た時、お話を思い出すと同時に少々驚いたのであった。ただ内容を読んでにんまりとした。私事を申し上げるのは恐縮であるが、私の本格的な喫煙歴は遅く三十代に入ってからであり、その切っ掛けはアメリカ土産のコーンパイプであった。八〇年代に入るとロンドンのパイプ専門店に仕入れたブライアーパイプで悦に入っていた。しかし九〇年頃になると、WHOの勧告もあり欧米では

岡島・中島協定（略称ON協定）

煙草と絶縁する目的をもって下記の規則を定める。たいへん厳しい規則であるが、その厳しさが真の愛情であることを肝に銘じ、涙を飲んで規則を遵守すること。

- 一、禁煙を宣言して以降、煙草一本の喫煙に対して、一万円の罰金を払うものとする。
- 一、自己の申告によらず他者からの密告により事が露顕した場合は、一本につき、二万円の罰金を払うものとする。但し、内、一万円は密告者に与える。
- 一、密告者は複数でも構わない。ただし、支払う金は、一本につき一万円という基準額をその人数に応じて案分するものとする。
- 一、一人の罰金が十万円を越えた段階でこの協定は自動的に無効となる。また、それ以前に退会する場合には、それまで支払った罰金と十万円との差額を支払わなければならない。
- 一、罰金は年一回の温泉旅行に使うものとする。

以上

以上です。二人だけでスタートしますが、これから増える可能性もありますので、主語などは曖昧なものにしています。御検討下さい。

とりあえず、御報告まで

草々

1996年9月5日

岡島孝光

中島三男

資料2

喫煙に対する風当たりが強くなって来ていた。ロンドンの地下鉄構内に巨大で数も多かったタバコの広告も全て無くなったのに気付いた時の驚きは今でも忘れられない。そのような変化の中で、私も親族から自らの健康問題ばかりでなく、場合によっては相手を説教しなければならぬ職業にある者が吸ってどうするの、と意見されていた。五十になったら禁煙するかと考え、中島先生から話が合った頃は、すでにほとんど止めており、申し出に対し、たとえ一本に付き一万円であろうとも自信があったのである。私は、けっして先生からの協定が切っ掛けで禁煙したのではない。

私の中島先生のように今日まで悩ましい思いをせずに居られるのは、一つにパイプによるのではないかと思う。紙巻きタバコのように無意識に手が伸び吸ってしまうのと異なり、パイプ

の場合は仕事であれば中断して一つの儀式が必要となる。また、パイプの場合は、胸に吸い込むというより、胃袋で食す感じである。タバコの習慣性は紙巻きよりもパイプの方が低いように個人的には考えている。

先生は、私が「律儀にもこれを機会にきっぱりと喫煙をやめられた」と記されているが、先生との協定を契機に禁煙したわけではない。すでに実質的に止めていたのである。また中島先生の作成した協定はよく読むと、人を食ったというかユーモアに富んでいる。一本に付き一万円の罰金で、十万円を超えると協定は自動的に無効となる、という事は、十本以上吸って違反しましたと自己申告すれば、一錢も罰金を払う必要はないのである。この条項は協定が提出された段階で削除すべきであった。そうしてあれば、中島先生のこの度の退職金はすべて私の銀行口座に振り込まれたにちがいない。おそらくそれでも罰金は足りなかったのであるが、まことに「後の祭」であった。

先生の誤解をもう一つ。それは、「岡島は今でもこれを額に入れて大事に飾っている」と述べているが、先生が学長に就任した時、私は「せめて学長職の間は禁煙しないと」と言ったのであるが、どうも無理のようであった。特に学長室で密かであっても喫煙されてはたまらない（私が学生部長の折、二〇〇〇年の「健康増進法」を抛所に、キャンパス内は指定場所以外、すべて禁煙としていた）ので、先生を戒めるために特別に厚紙の額縁にコピーを入れ学長室に掛けてもらったのである。額入りを作ったのはけっして私自身が大事に飾るためではない。大変な誤解である。

先生がすでに副学長になってから以降、平の教員とは同じキャンパス内でも住む場所が異なり、ほとんど遭遇することもなかった。それでも何かの機会に一緒になると、「先生、僕少しいつもと変わっていると思わない?」

と。こちらは「何が?」。「分らない? 僕ね、この三週間(時には十日間)吸っていないんだ」と、ニコニコ。このような会話を一年に二、三回繰り返した年もあったように思う。

このように話すと、先生はまことに意志薄弱、優柔不断の人間と考えられては困る。先生は個人的にはタバコに関しては弱い人間の一面を有していたけれど、公人としては、困難な問題に対し、毅然とした姿勢で臨まれていた。先生は学長に就任すると、それまで積み残されてきた大きな懸案事項、学生定員の調整が絡んだ学部学科の再編、平塚キャンパスの整備等の諸問題の対応に追われた。これらは、学内で大きな利害対立を孕んでいただけに、その対策と解決には大変はご苦労があったと思う。ただ先生の穏やかで優しい人柄が、公人としては誤解されたり、時には信頼していた人物に裏切られたと感じて人間不信や孤独感に襲われることもあったのではないかと、と憂慮していた。

中島先生は、在職三十五年間、私の『戦友』として、またこの約十年は、副学長そして学長という『神奈川大学の顔』としてほんとうに誠心誠意日々努力されてきた。就任以来、身近に居た一人の友人として、改めて、心よりその御苦勞をねぎらいたいと思います。

すでに触れたように、先生は公人としての立場から長く私的生活を犠牲にされてきた。その間、ご家族、わけでも大学人として研究者でもいらっしゃる奥様の献身的な支えがあったのである。

ただでさえ恐妻家である先生もしばらくの間は贖罪の日々で大変だとは思いますが、私も割り勘の温泉旅行を御一緒できるのを楽しみにしています。